

最上徳内書状の史性と人性

小笠原 二郎

天明から寛政・文化期へかけての近世日本の夜明け前の頃、北方探險に尽力した最上徳内ことは、間宮林蔵・近藤重蔵・林子平などと共に、広く知られている。しかし、その割合に、青森県内に知られて居らないという事は決して理由のないことではない。天保七年（八三六）、八十二歳で、その波瀾の生涯を閉ぢるまでの間、青森県野辺地町

に在住したとおもわれるのは、天明七年から寛政元年までの僅かに、二三年にすぎない。しかし、徳内没後すでに一四〇年をへた今日まで、

徳内の生涯の妻・ふでの生家・島谷家に遺存した史料は決して少ない数ではない。これら史料の重要さは、その数よりも、むしろその質にこそあると言える。いま、この事にふれる前に、一言、徳内の出自とその周辺を洗つてみることにしよう。四国淡路島安田村出身の三人兄弟は、ゆえあつて海路北を志したが、長兄は南部北郡大間湊に、次兄

又之亟は南部北郡野辺地湊に、末弟徳兵衛は羽田村山郡最上楯岡村にそれぞれ定着した。本稿の主・徳内は末弟・徳兵衛の末、妻ふでは次兄又之亟の末である。ここで改めてふでの直系についてふれると、

又之亟^(島重)・清四郎・清吉（三代清四郎）・秀次郎とつづく。清吉は即ちふでの兄、徳内の義兄である。さて、徳内は島谷ふでと結婚する（天明八年）前から晩年までしばしば改名している。姓は、はじめ素浜、

高宮そして最上。名は常矩、字は子員。通称房吉、元吉、俊治など改め、結婚後は徳内、晩年は須磨雄で終る。号は鶯谷、飯山、白虹斎など称した（島谷良吉氏・吉田常吉氏）。戒名は「最光院殿日誉虹徹居士」（島谷良吉）、「最上院白誉蚊徹居士」（吉田常吉）、と異同がある。これはいづれか誤写であらう。

徳内・ふで夫婦には、ふみ・もじ・効之進・かく、の四人の子があつた。この内、効之進は徳内の後嗣、外はそれぞれ他家へ縁づいた。四人の子にはそれぞれ子があつたから、ふみ（天保四年没）、効之進（天保六年没）を除き妻のふで、もじ・かくの二人の娘とその夫、その孫彦などに囲まれ、比較的平穏無事の裡に生涯を終えたものと思われる。

徳内の業績はおよそ二つに分けることができる。しかし第一の北方探險については、世上喧伝されているから除き、第二の著述、思索活動について一言ふれることにする。

いま島谷良吉編・著書目録から関係分だけを抄記すると、度量衡説統、天然訓、論語^{いんぎょ}彙^{くわい}、学初^{がくしゅ}堅^{けん}頃、蝦夷・日本・独逸語辞典、日本・蝦夷・独逸語辞典。この外、未発見の分として、八線真表・八線対数表・加減代乗除表、傷寒論註釈・調剤秘書、孝経古今異同考、数談、

北陸祇役志、北辺随筆など実におびただしい著述をあげることができ
る。ここで重要な事は、今日までに公刊されたものは僅かに、蝦夷草
紙、度量衡説統、論語彙訓の一部、傷寒論註釈等僅少で、他はすべて、
稿本のまゝいたずらに某々大学に眠っているであらう事および、前掲
の蝦夷・日本・独逸辞典類、シーボルト著「日本」などが、オランダ
国内にあるだけで、故国日本に存在しないだろうという悲しい事実を
あげることができる。しかしいたずらに死児の齢をかぞえることはやめ
よう。いま、徳内の関連史料がほとんど散逸してしまい、更に、その
大多数が一部書庫に秘蔵されている現状から、野辺地・島谷家伝存の
史料は今後増々その価値を高めるものと思われる。特に著作以外の史
料を求めるとすれば、僅かに、北海道名寄の伊能家、山形県楯岡町の
笠原家と当島谷家より外ないとするならば、思い半ばに過ぎるものが
あろうか。本稿では、これまで挙げた著述活動の僅かに片鱗を示すに
過ぎないが、書状(一)では独自の処世哲学や信仰観、(二)では殖産技術、
(三)では本草学、(四)・(七)では中国の古典・論語彙訓、孝経(こうしやう)
証学等の研究開発に終始した学者徳内の真摯な生活態度やそれをめ
ぐる周辺の事情をうかがうことができる。(次表参照)

最上徳内書状		備考
あて先	年 月 日	
一 島谷清助	(文化二年) 十月 七日	徳内自筆
二 安田秀次郎	(文化十三年) 八月二十七日	"
三 島谷清吉	(文化十三年)	"

あて先	年	月 日	備考
四 安田秀次郎	(文化十四年)	二月二十四日	徳内自筆
五 島谷秀次郎	(文化十四年)	"	"
六 島谷秀次郎	(文政一年)	五月二十九日	"
七 島谷秀次郎	(文政十二年)	(二月二十九日)	"
八 島屋清四郎	(天保五年)	十一月十三日	代筆 須磨雄名
九 島谷秀次郎	(天保五年)	"	徳内 絶筆?
十 島屋秀次郎 清四郎	(天保五年)	"	島谷 ふで筆

注 ①あて先、年月日欄中()は推定による。

②書状(+)は妻・ふで筆を付載した。

おわりに、本書状の解説については、原書によらず、そのコピーに
拠ったため難読の箇所があったこと、および本文全般についても、考
証不足のため思わぬ誤りも恐らくあらうと思われるので、広く識者の
ご示教を仰ぎたい。島谷家当主の好意を感謝して筆をおく。

書 状

(一)

以手紙啓上仕候。然者昨日者久々ニ而懸御目、殊ニ緩々御馳走ニ相
成、得ト御物語も承知仕、誠安心仕候。

一 今日野辺地立より途中相考候得者 申咄候儀も相残、且又今夕安之
亟(いそ)も面会、種々物語も仕候。いかにも胸中相塞り熟睡も仕かた、
申咄し相残候事共相認懸御目たく、種々左ニ進呈仕候。

一 天より徳を授かるべき法と、天然之徳を破るべき法と、即座ニ聞て即座得べき事あり。此説ハ迎も毛唐人之経書等ニ而学得候義ハ不相成、今引用セル処ハ蠻説を御聞ニ入申候。是ハ他人ニ申候義ハ勿論、親兄弟へも申さぬ事ニ御座候。先づ **七克** といふ書ハ蛮国の大学・論語とも申へき書ニて、湯若望などといふ蛮人、中華ニ入、演舌したる書ニ而、公儀ニ而禁書ニ而、江戸ニ而ハ聖堂之内之練屏倉ニ納置、土用干之節ハ林大学殿御自身干かへし、書生之手にも懸けず。此書を所持之人ハ耶蘇宗門之徒ニ相成候。長崎之書物目利所ニ三十二部。禁書と唱候内こと

天主実記

七克

畸人十篇

等ハ甚た

秘事ニ而、日本國中ニ不可有の書ニ候。右之内ニ天より授かる徳を厚する教ハ笑ひ不申事を第一ニ仕候。阿蘭陀人・魯齊亜人等も兄弟同様之朋友ハ格別、其外一切笑ひ不申候も、則右之天徳を厚する教ある故と相見候。扱又、天徳を保ニなせ笑ハぬか第一なれハ、笑ハ不敬の随一なり。故ニ徳を破。扱又、なぜ不敬なれハ、人の心を浅見する故なり。其証拠ハ笠と間違ひて、摺鉢をかふれハ、皆人笑ふへし。是則摺鉢をかふる馬鹿者めと、其人の心をサミする故ニむしやうニ笑を發する也。又高位の人之前ニ出れハ、只汗流れて、笑ハ決而出ぬものなり。是人之知れる処なり。然らハ笑といふものハ、人之心を浅見するものニ而不敬なり。不敬なれハ天徳を破なり。扱又、不敬ハ天徳を破る証拠ハ、子供を見タニ、泣出そふニ笑止の顔をして居れハ、菓子でも遣たく存し、笑て遊居れハ、菓子を遣す心一向なし。是則、笑ハ天徳を破る事疑なし。天徳とハ天より授る徳なり。徳とハ衆人の憐を受ける事なり。有徳の人とハ天下の人の憐を受ける人

といふ事なり。又一ツの不敬ハ天徳を破るの証拠ハ禅宗坊主と一向宗坊主とを見るに、禅宗ハ学文もある律派ニ而、位階もよし。一向宗ハ学文もなく、妻子を持、位階ハ卑し。然れ共、衆人一向宗を尊崇する事ハ、天下の勢ても叶ハヌ程なり。先年京都大焼之後、禁裏并公家・真言・天台之普請ハ埒明かぬ中ニ、西本願寺・東本願寺の普請、全日本國中より山之如ニ集申候。且又禅宗学者、或ハ五山三内之長老達カ江戸ニ来候而も、参詣する人も無御座候。本願寺之江戸ニ来る時ハ参詣ニ而群集の中ニ人死有之程ニ御座候間、此儀能々御考可被成候。一向宗ハ、朝夕の勤も御法談するにも、只管ニ弥陀を頼候而、笑もせぬ故ニ、衆人倚依する也。禅宗杯ハ説法ニも笑ふやら声色を遣ふやら、剃、禅宗の授戒ハ釈迦の時之通ニ、修行するニ、其時之法問ニ、ホホヲ珍重々々杯といふ。是即、ホホヲといふ、おかしいといふ事ニ而、則笑也。是故ニ衆人倚依をなさず。如此笑ハ天徳を破る証拠數百条もあれとも、推而知へき事なれハ茲ニ文畧仕候。

一 貴様儀年若ニ而大身上を引受、御辛勞被成候ハんと、拙者ニおもても痛心、熟睡致さず案候儀ニ付、右之教訓者書記進上致候ものニハ無御座、書籍類懸御目、独御悟被成候様可致筋ニ御座候得共、夫ニ而ハ、間ニ合不申候ニ付、無抛、今夜相認進上仕候。得と御勘弁之上、思召ニ叶ひ候ハハ、右之一事を御修行被成候儀可相成哉。弥思召立被成候ハハ三年相立不申内ニ、急度天徳を授候事御請合可申奉存候。拙者も入牢被仰付候節、天を敬し君を敬、一向笑ハス罷在、溜牢より帰牢を願、其後帰牢被仰付。拙者も牢内ニ而、天稟之命を終

候心得ニ御座候所、不計して天禄を保事授り申候。右天徳を厚し候修行ハ、夫婦と兄弟之中ハ格別ニ而、是ハ折節笑候儀宜敷、其外親・伯父・縁者より主君類・朋友ニ対し候儀ニ御座候。別而御指図ケ間敷候得共、御客ニ類し候分、船頭或ハ人足・外船・或ハ馬牛迄ニ施し候事ニ候。

一 右者釈迦ニ心経とやらニ候得共、夜前より今日中、貴様心底相察候処、甚苦勞ニ奉存候ニ付、右之次第申進候。乍然御用不被下候迎も、私ニおゐてハ相替儀無御座候。若又御用被下候ハハ誠ニ私も恐悦ニ奉存候。扱又異国ニ者右躰之教七ツ有之、是を書記し候籍典を七克と申候。其内唯一事、不敬を致さぬ計ニ而天徳を授候ハ疑敷も思召候ハハ、左ニ申進候。

一 蠻人肥前天草嶋ニ只老人罷在、最初者日本言語ニ而日本教化之為ニ渡来致候旨等申之、夫より新井筑後守^白石^先江戸ヘ呼寄、對話致候所、以之外博学多才之者ニ而、生し差置候而者不宜趣ニ而人牢申付、食事不與ニ干シ殺し申候。其時右蠻人牢内ニ而、容貌止敷、日本を敬し、仮初ニも不敬無之様、笑者勿論、無言ニ而三十日程相立候所、老人を番ニ附候。此老人願出候処、何卒右蠻人助命被仰付、其代りとして、私之命を断被下度と申立。夫より此老人御吟味ニ相成、何躰之勤ニ逢候哉と相尋候得共、一切無言ニ而一事も承り候儀も無之候得共、容貌正敷相慎罷在候。毎日見候ニ付、何となく命を取替度程ニ成り候段申之。右者委敷白石之採覧異言ニも載たり。是以御考校可被成候。不敬致さず慎処より、命さへ遣し度程ニ憐を垂候なり。主君・朋友ニ不敬を致さず、修行被成候ハハ、天徳授らすとい

ふ事、決而なき事ニ奉存候。況や、金銀米錢をや。右蠻人者三十日程ニ命を貰ひ候程之修行を致し候所、此方ニ而累年慎候而、聊之天徳を授らんと欲する。叶ハぬ事ハ有間敷と、拙者ハ存候。貴公之思召ハ強而御勤も難成御座候得共、能々御考被下度候。六ヶ敷儀無之、漫ニ笑ハぬ事を心願ニ被成候得者、大率ハ沢山ニ御座候。今更格別ニ人之目ニ立候ハハ、是亦如何ニも奉存候。

一 右思召ニも叶ひ、万一御用ニ相成候得者、私も大慶仕候。就夫而者、私より教訓を得候事ハ言語ニ者猶更之儀、顔色ニも見せぬよふ被成、此書状ハ御熟読之上燒捨可成候。右品々進呈仕候も、余り九度々々敷候得とも、某も、身寄之内ニも貴公を格別と存候より事起り、種々相認候間、御免可被下候。以上

十月七日(文化二年)

徳内拝

清助殿

猶以、此書付後々存候而者、不宜候間、早速火中可被成候。

二白、御親父并御家内其外共宜敷御申台可被下候。

追啓申上候。今晝目覚ニ相考候得者、書付候物者、口演程ニ者行届不申ものニ御座候得者、夜前有増ニ者書取申候心得ニ者御座候得共、又候申進度左ニ申上候。

別紙書付候御勤方ハ儒ニ而申せハ、克已して仁ここに至るニ而、其席ニ而動候得者、其席ニ而天より仁を垂る。譬ハ、人より宝を得る。此時多分おかしき物ニ而、皆人笑ふ也。然るを、笑ハスに、心ニ思ひ出し、人之授るハ即天之授る所也、必不敬ハならぬ事なりとおもひ、追而恩を返し、天之憐を報せんとおもひて、唯難有事といふて、笑ハス感涙

いたして受へき事也。左様いたセハ、又々天より夫を倍して憐を下さる也。嬉敷之儘ニ大ニ笑ひ候得者、天帝より憐を垂るも沢山なりとて、其後御見捨被成候。是を儒書ニ而者、天之刑神といふ国語の中ニ見ゆる。御考可被成候。西洋之國ニエンゲルスといふ物あり。即儒者共之所謂天帝なり。其エンゲルス十二神あり。内八神ハ善事を導く也。内四神ハ惡事を導く也。此四神ハ人の貧ニなる事、不徳ニなる事、刑ニ逢ふ事を悦ぶ神なり。世上ニ善事をなしても、甲斐もなき事あり。是則心の悦を発して笑ひ候て四神のエンゲルスニ見込たるもの也。善ニ付惡敷ニ付、慎て笑ハスニ居レハ、天より猶々憐天下の人々より宝を賜ふ也。其証拠ニ入御覽候。

一 去年魯西亞の國王より日本へ呈書并幣厚くして使来る。遠山金四郎殿行候て上より申渡を告る。魯西亞之使、謹て承り、一言もいワす、敬して帰る。此噂を聞もの、江戸ハ申ニ不及、京・大坂・長崎之者迄も、扱々公儀之被成かた、余りむこい事ニ而、嚙々魯西亞人も残念ニ候ハんと、憐を申さぬハなし。是即惡敷ニ付而も、唯慎て笑ひもせず帰る故ニ、エンゲルス之憐を蒙り、日本中の人ニ可愛からるる行ひなり。是等之御咄者、親兄弟へも必々他言御無用。

右修行も被成候思召ニ御座候ハハ、幸を得給ふも、掌を反す如く、明秋帰府之頃、悦敷御様子ニ見受申度奉祈候。以上

(注) 洋書「七克」「天主実記」「崎人十篇」、禅宗・一向宗僧侶の行動、徳内自身の入牢の体験、天草島西洋人に対する新井白石の処遇、牢番人の感応、キリスト教の教えるエンゲルス十二神、露使レザノフに対する遠山金四郎の処遇など日本から西欧にわたる実例と体験

を例証、独特の処世哲学を展開し、島谷家三代清助に対してその心構えを示唆したもの。徳内の開化思想と人生に対する真摯な態度をうかがう事できる。

書 状

(二)

一 私儀申(九)年以来蠟製法御用ニ而、猶又三日出立之積ニ而、甚取込候故、荒々申進候。右御用武州・相州・甲州・駿州・上州・野州廻村いたし候ニ付、明年五月頃迄ハ帰府不仕候。此節、平松八十吉同居仕候ニ付、家内賑々敷、おもし方よりも考封申進候積り、其外おきよ、此節懐人、何卒今一応御隠居其外へも懸御目度、兼々存込候得共、式百里相隔候事故自由ニ者難相成、残念ニ御座候。右之趣得御意取込早々申進候。御隠居ニ者別段不申上文畧仕候。宜敷頼入、野村氏ハ考封、是又宜敷御申伝可被下候。以上。

閏八月廿七日(文化十三年)

最上徳内 ㊦

安田秀次郎殿

猶以、御家族一統宜敷頼入候。折角秋冷大加養第一御自愛可被成候。

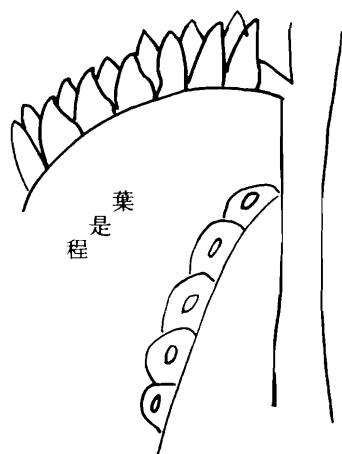
(注) 製蠟御用で武州・上州外諸国巡回のことを報ずる。

書 状

(三)

度々御紙面、殊ニ森寛蔵帰府之節、巨細御申越被成候趣逐一承知仕候。先以御隠居始御一統共御安全珍重奉存候。当方皆々家族相替儀無

御座御安意可被成候。然者近来御不快之趣、御紙面之趣ニ而者、決而難治と申筋ニ者無御座候得共、遠方之事故、書面而已ニ而主方も難申進、甚心痛ニ申暮候儀ニ御座候。乍然いつれ撰方第一之儀ニ御座候間、小便通薬者御用心被成候方可然奉存候。ヲクリカンカリ一味糊丸麻□太三粒、又者四五粒御用可被成候。是者大人小便通し候而已ならず、小児三より十歳位迄、大便之色崩蔓色ニ相成候節二三歳ならハ、二三粒相用候得者、翌朝大便之色元之如、小便十分ニ通し、決而疳と申儀無御座候。都而大人・小児共、酸肺液を生し候得者、大人者胸焼と申、酸涎・酸噫氣出て申候。小児ハ大便崩蔓ニ相成候。ヲクリカンキリ者、右酸肺液を治し候故、宜敷。若又、小便茶色ニ、少々腫氣之心得有之か、又ハ脈伏シ候故、ある脈顯れず、腫氣に襲ハれ候様子ニ御座候ハハ、先ツ療熱を解し候方宜敷、黄蓮解毒湯、加竹節、即黄蓮小黃芩梔子黄蘗各中竹節人參小。此湯味苦、こまり候ハハ、粳米沢山ニ入、煎用候得共、自ら小便通し顔色も血色出て候様ニ相成候。若又伏熱様子無御座、小便清舌上苔并喝等も無之、却而、口中くるハしく、水を貧り候心持之小便閉ニ御座候ハハ、五苓散。水を貧り候筋ニも無御座候ハハ、猪苓湯ニ加茅根、又ハ合歡草オムノキサウ合歡草ハ漢名不相知、本草ニも無之、葉も実湿地田之畔等ニ沢山ニ御座候。高老尺余ニ相成、茎ハすべらかにて青く、葉も茎も皆用。



実も是程ニ而、秋ハ色黒く枯るる

若又、膀胱熱小便茶色の類ひ也絡候筋ニも無之、却而胃府虚冷、食化し兼、大便やハらかく、小便渴り候不食と申筋ニ御座候ハハ、呉朱湯傷寒論ニ加阿膠、或ハ玉子砂糖等分、日々食療いたし候敷、若又、腰以下計腫氣様子ニ而、小便少く御座候ハハ、白頭翁湯、加阿膠甘草ニ而可然哉。右之内御考御手療被成候様奉存候。御書面計ニ而者病症歿と取極かたく、色々相認差進申候。

(文化十三年?)

(鳥谷清吉あて?)

(注) 妻・ふでの兄・鳥谷清吉(三代)に対し薬の処法、養生の仕方などを報じたもの。徳内の博識を証するに足りる。

書状

(四)

此度、田口氏松前出立ニ付、致啓上候。然者其御地御家族方愈々御安泰被成御座、珍重之御儀奉存候。当方皆々相替儀無之、罷在候間乍

書 状 (五)

憚御休意被成候様奉存候。扱又、右田口氏罷越候ニ而、萬五郎を相頼差遣候間、其御地ニ罷在候様申付、差遣候儀ニ御座候。私儀者御用在出之間、家内ニ而も彼は世話仕候趣ニ者御座候得共、何分ニ者行届不申、去秋以来者、私之供ニ召連罷越候得共、久敷江戸ニ罷在候ハハ、身之為ニも相成申間敷相見候ニ付、差遣候儀ニ御座候。且又、右同人之儀、出府之節、御家内之御様子、先入津等も相応ニ有之、御取統方も相応ニ者御座候趣、承知仕、一入安心者仕候得共、御大勢之事故、万事御辛勞も可有之儀と、朝夕御噂申暮候儀ニ御座候。当方之儀者、至而質素ニ相暮候得共、引続、御用向蒙仰、益々世上手広ニ而、其上子供皆々無病生長、且おもし儀も女子出産、おきよ儀も女子出産、孫彦迄も繁栄、無此上相樂罷在候。且又、拾貳三年以来者、論語著述ニ取懸、此節大凡者出来仕候ニ付、校考相済候上者、写本ニ而も懸御目候様可仕候。将亦、又吉悻、江戸表ハ為御登被成度趣、兼而承知之所、随分実駄ニ御仕入被成候而、差遣候ハハ、江戸表ニ而、私より片付候様、可仕候間、其思召ニ御取計可被成候。余者萬五郎より巨細之様子御尋可被下候。折節、御用取込早々申残候。猶期重便可得御意候。以上。

二月廿四日（文化十四年？）

最上徳内 印

安田秀次郎 殿

（注）家族の近況、著述にふれた島谷あて書状。

別紙得御意候。御出生拜読御目出度、御序野村ハも宜敷御申合可被下候。おてつも立花^ハ嫁り、勇司十七歳、是以目出度御安堵之由、御同慶奉存候。且又、宿老役御勤被成候段、誠面目無此上御大切御勤被成候様と奉存候。御面会仕御様子も相尋度吳々申暮候事ニ御座候。遠路ニハ御座候得共、松前通行も御座候故、折節御申越被成候様存候。此方より委細可申進候。

一 縁類之惣容名面之儀御申越ニ付左之通。

高 津 八之丞

病死養子・歟五郎、鉄之助之兄。今ハ縁薄き方ニ候得共、おふみ之娘・おきよ、歟五郎之娘ニ而、荒井平兵衛方^ハ養女ニ遣し、同人より、田中新五右衛門^ハ嫁いたし候ニ付本縁ハ有之、荒井平兵衛妻ハ八之丞姉。八之丞夫婦悻老人、名は信平。

平 松 八十吉

妻 おもし

娘おのふ当二歳

是ハ親類・松平左源太、松平六左衛門、何も四百五十石旗本ニ而、一駄ハ平松ハ本家ニ候得共、当時小高ニ御座候故、松平を平松と名乗罷在候。松平家十八之内ニ御座候。

荒 井 平兵衛

是ハおきよを養女ニ遣し、其上右妻ハ、病死養子・歟五郎姉夫婦、悻一人、次男ハ木原半兵衛^ハ養子ニ行。

是ハ本与力ニ而、当時天文所書物出役。

田中 新五右衛門

妻 おきよ

娘 老人当三歳

母 老人

山城 充之進

是ハ田安様近習番ニ御座候所、此節不

妻 おふみ

埒ニ而、おふみ離縁を申ニ付、当分おふ

娘 おしね

み、私方ニ罷在候。他人同様之姿ニ御座

〃 おみつ

候。

〃 おうら

男 巖次郎

母 老人

弟 老人

一 論語著作、一見被成度、甚以悦敷事ニ御座候。都合貳拾三卷、し

かも大冊ニ御座候。

采用之書

巳刊行
足利学校 二本

梁 皇侃義疏

宋 朱無集註

明 林希元存疑

〃 張振淵說統

唐 韓愈筆解

明 都景山詳明

清 毛奇齡稽未

五阿含集五百七十卷

考異之書

卷子本 菅丞相震筆 眞 隋・唐前五代の論語

正平本 清人之所貴界浦道祐著

宣賢本 天文年中宣賢著

慶長本、建武本、大永本、永禄本ノ類、皆唐代之舶来、仁斉、

徂徠、太宰等不知モノ

考徴之書

明 王受四書徴 明 懼伯敬翼考

明 辟方山人伯奇編

清 閻若琥積記 清 永慎修典林

都合廿卷、論語一卷、孔子年表一卷、助辭解一卷、漢・魏以来註

家二百人程姓名。

考異之事ハたとへハ、

学而時習之不亦悦乎

悦字卷子本、正平本、永禄本、皇侃義疏、慶長本皆同。但、宣

賢本、国訓本邢昺註疏、朱無集記トハ悦作説。是必誤写也。隋

唐以前ハ作悦也。集註ニ説、喜意也ト註スルハ、誠ニ古本ヲ不

知ノ弊也。

右考異之事ハ

論語集解攷異 四卷 代金式朱位

寛政三年 吉漢宣著

是ハ、日本ノ古本六通、唐石径旧鈔本・皇疏・唐隆徳明积文・

明監本・邢昺正義・朱無集註、不殘考校シテ出ス。

助辭解之事ハ、

周之辭と漢之辭と差アリ。唐宋ニ降リテハ勿論之事也。我邦ニテモ、源氏物語の時、日本紀ハ註解ナケレハ、難得而解也。今ニ至テハ、源氏さへ註解ナケレハ分リカタシ。然而、唐宋ノ人、助辭ノ事更ニ解セス。後世茲ニ因テ困ス也。故此度、助辭解附字訓と転訓アル事、合テ一卷ニ相成申候。其訳ハ

也字 有転将 有通則 有通文 有通兮 有通然 有通而 有通

者 有通乎 有通邪 呼辞 如字

外ニ者也 也者 也與 也夫 也哉 也与哉 也已矣

乎字

矣字

焉字

與字

夫字

哉字

右同断

○ 転将 其行已也恭 乃其行已将恭也 之類也

其事上也敬 乃其事上将敬也

○ 通則 耕也鋤在其中乃耕則鋤在其中也 之類

学也禄在其中乃学則禄在其中也

○ 通文 自欺也而犯之 乃自欺又抑犯之也

斯人也而有斯病乃斯人又抑有斯病也 此之類

也吾亦欲無加諸人乃又吾亦欲無加諸人也

○ 通兮 翕如也 乃翕如兮也

純如也 乃純如兮也

無適也無莫也乃無適兮無莫兮也

○ 通然 必也射乎 乃必然射乎也

必也臨事而懼 乃必然臨時而懼也

○ 通而 非敢後也馬不進也 乃非敢後而馬不進也

與其進也不與其退也乃與其進而不午其退也

○ 通者 其為人也 乃其為人者也鄉也乃鄉者也

今也則亡 乃今者則亡也今也乃今者也

○ 通乎 何器也 乃何器乎也

何以謂之文也 乃何以謂之文乎也

○ 通邪 見不賢而内自省也 乃見賢何内自省邪也

井有仁焉其從之也 乃井有仁何其從之邪也

○ 呼辞 丘也 鯉也 由也之類

也者 也與 也夫 也哉 也與哉 也已矣

同右二十篇中之文ヲ付テ解ナス

正訓・転訓之訳ハ

薄責於人則遠愁矣

責者求也、モトム 算也故從貝古者貝ハ錢也。ハタル 責從糸從禾字皆求之義也。

績イトラモトム也、モトム 績クイモノモトム也、フミ績ミモトム也。然所正訓ヲ不用而転訓ヲ用ユ

故、文義ヲ害スル也。借金ヲ責ルハ是セムル也。誅責ト連統訓

スルモノハ転訓也。

動容貌斯遠暴慢 動之不以礼未善也

動正訓蔽也、転訓揺也。容貌蔽ニスルナラハ暴慢ヲサケルヘシ。
ラコソカ

容貌揺トテモ、暴慢ヲ違ヘカラス。容貌揺ト言、何訳カワカラス。二千歳註家揺スルトナス。右之類七十ヶ条程附録ニ載也。皆先輩説サル事トモ也。此事字典類未載。

(注) 徳内一家の近況と着述について、野辺地町・島谷秀次郎？

へ報じたもの。論語傳訓二十三巻の内容について、その典拠考証のし方について概説する。後年一巻を追加、全二十四巻としたという(島谷良吉「最上徳内の出世と人格」)。

書 状 (六)

私兄儀長病之所養生不相叶、去々子年(文化十三年)十二月廿四日御病死之段、此度御書面ニ而奉驚入候。式百里懸隔之中、不悌之段恐入奉存候。御愁傷之段可申上様無御座候。

五月廿九日(文政一年)

常 矩 花 押

秀次郎殿

(注) 妻・ふでの兄・島谷清吉(三代清四郎)死去についての悔状。二年間それを知らなかった事になるが、これは、製蠟御用で諸国巡回中、不在であった為であろう。

書 状 (七)

昨廿八日清四郎儀、江戸帰着仕候所、早速出立帰国いたし候積ニ付

得御意候。先以御総容御揃連年御賑々敷御繁栄之趣も、清四郎口演ニ而具ニ承、家内中相悦、誠ニ安心目出度奉存候。扱亦清四郎儀も遠路無滞帰路ニ被成、殊ニ旅疲も無之相見、段々旬季合も宜、一方船入津之時節ニ至候而、在所表差急候心得等、深勘弁等も有之候段、尤之筋ニ而、敢而江戸表見物逗留之儀相進不申。御存之通、江戸住居元來窮屈、御馳走いたし候様無之、甚鹿末之至ニ御座候。忤娘等より宜敷申遣只候様申聞候。江戸表之儀者私七十五歳、

随分丈夫、多用ニ而罷在候、忤・効之進儀も実精勵相替儀も無之、御廣敷向之評判も宜敷候。

其外おもし儀も相替無之、娘おしげ当年十三歳、此節素読、孝経・詩経等仕舞、礼記も押付仕舞ニ相成候。只惜哉。養子文吉儀兎角不和ニ而、未タ引取も不仕候。扱又忤・効之助子供当年三歳、名ハ宗三郎、才之生れ時ニ相見。末子おかく儀者、去夏簪養子を貰ひ、名ハ欽次郎。是ハ効之進子供も幼年之儀ニ付、ひかへにいたし置、往々ハ別家相立候様ニも可仕候。当年十九歳ニ而松前ニ罷越候。早川八郎次男ニ御座候。

(実万)
一 論語著作二十四巻傳訓と号す。京都三条殿ニ追々入御覧有之候所、当正月右御序被下置。此節彫刻申付有之候ニ付、出来次第ニ差進候様ニ可仕、右ニ付、序之次ハ、参閱諸先生、修校諸先生都合四拾人計も書載仕候積ニ御座候。

参閱諸先生

寺嶋 俊平先生 九条 殿主
村上 応介先生 三条 殿侍講
、 、 、 、 、 尾州・紀州
、 、 、 、 、 水戸 儒其外
、 、 、 、 、 京、大坂、西国、北国
長崎等ニ御座候

修校諸先生

當時諸国之学友之外、門人。(島谷秀次郎)此内安田子行ニ書入候心得ニ御座候

一 孝経を穿鑿仕候前、四十品余も相集候内ニ古孝経鈔本至而筆画等
も久敷、弘法・佐利(理)時分ニ而、古字四百余有之、(五〇七・五三〇)繼体天皇之時始而
経書渡来之時之旧物ニ可有之評判ニ而、西晋太康五年ニ候得者、古
文孝経等、梁・文徳殿ニ而周師ニ焚れ候以前之物ニ御座候。其外品
々調合、名号孝経奥章二卷。是も去春三条前内大臣殿(二八四)も差上候。
猶亦此度、水戸様侍講も差上候積之所、未だ複本出来兼、是ハ当
秋頃迄ニ写し差進候様可仕候。右之外申進度儀も許多御座候得共、
差通候故文略、清四郎口演相頼候。何事も万歳目出度、後便相衆
罷在候儀ニ付、便宜之節、御紙表相待候。家族一統より宜敷申聞候。

二月廿九日(文政十二年)

秀次郎殿

徳内

猶御惣容：宜敷御申合可被候。

又曰、おもし娘おしげ手跡懸御目候。

(注) 孫娘・おしげが十三才で、すでに、孝経・礼記・詩経など古
典を素読できる事を、祖父・徳内が自慢する好々爺振りが行間
に躍如とする。論語いくん彙訓二十四卷、孝経奥章二卷が上梓される
までの事情をうかがえる。「修校諸先生」欄中の安田子行とあ
るのは、島谷秀次郎(四代) 自分の雅号である事が、『青森県人
名大事典』にみえる。

書 状

(八)

当歳八十歳ニ付代筆を以申進候。昨年者米穀高値に付、御心配被成
候義と遠察いたし候。然者私懇意之衆中、其御地ニ御出被成候ニ付、
定而御止宿ニ可相成候。躰ニ寄候ハハ暫休足被成候哉も難計、何義ニ
不依御世話被成候様仕度候。猶又委細之様子御報待入候間、右御仁ニ
書状御差出可被成候。外ニ宅状老通相添差進申候。右之段申進度如此
御座候。

十一月十三日(天保五年)

以上

最上 須磨男

嶋 屋 清四郎殿

(注) 改名後の徳内(須磨雄)が、代筆で野辺地町・島谷家へ、知
人の世話方を依頼したもの。

書 状

(九)

筆致啓上候。御惣容様御安泰被成御座、珍重奉存候。当方一同無
事罷在候ニ付御安意可被成下候。

一 去秋以来、米穀至而高値ニ而、江戸表も甚騒ケ敷、公儀より度々江戸中御救、此度御弘米等被仰付、夏中者百俵ニ付百拾五兩位、町売百文ニ付三合五勺位。此節二五拾老兩、町売七合五勺位ニ相承候。右ニ付、仙台・南部・津輕・秋田等も殊之外難儀之趣、江戸一般風説有之、甚心痛一向便宜も無之、家族一同案し罷在、御様子承度罷在候。

一 家族共左之通

おふみ	去冬病死
おもし	同居罷在候
娘おもと	当年十八歳
効之進事	
徳内	不相替出精相動候
惣領	宗三郎 八歳
次男	晴三郎 五歳
おきみ	六歳
おかく	
子供当時ナシ	
夫 太田 亀 吉	〔人相勤罷在候〕
改名 最上 須磨雄	八十歳
妻 息才	六十五歳

忤當時、浅草新堀抹香橋
組屋敷地内住居
改名 最上 徳内

(天保五年)

(島谷秀次郎あて?)

(注) 江戸の市況、徳内は須磨雄に、息子効之進が徳内にそれぞれ改名した事を報じたもの。この時、妻ふでも兎才と改名した、とする向きもあるが、婦人の名に兎才は如何と思われる。按ずるに、ふでのみは改名せず、もとのまゝ、原文の趣旨は、「妻ふでは息才(無事息災)で当年六十五歳にあたる」、とするのが妥当だろう。本状は徳内の絶筆か。筆蹟の一点一画渋滞して、ほとんど文字の体をなさず。辛うじて解読できる。

書 状

(十)

其後ハ久々御たよりもなふ、うち過ぎまゐらせ候。先々いまた残暑つよく御座候所、其御地にて皆々様かたお揃なされ、御障もなふ御機嫌克御暮被成候事、いか計く御目出度御嬉敷存じ上げ参らせ候。乍去久々御たよりもなふ、いかか御暮被成候事と、朝夕御尊申出し、御安事申暮しまゐらせ候御事ニ御座候へ共、誠ニ遠路故、よき御たよりもなふ御無さたのみうち過、^(殊)事ニ、去年より世の中も殊之外さわしかく、其御地なとハ一しは御むつかしき由風説いたし、いか計く御安事中暮しまゐらせ候。とふより御左右承り度存居候所、遠路故心にまかせ兼おりまゐらせ候。其御地御左右くわ敷御きかせ被下候様ニ、御頼申まゐらせ候。こなたにても、徳内初忤効之進、娘共も替りなふ暮居候。乍憚御心易思召被下へく候。扱また先年清四郎殿御出之節ハ両国亀沢丁ニ住宅致し居候処、此節又々転宅致候つもりニ御座候へ共、い

また住所定り兼居り候まゝ、もし御手帛御差出被下候へハ、両国横山町三丁目にて、書林いづみ屋金右衛方迄御差出被下候やうニ存まゐらせ候。其内住宅定り候へハ、又々御しらせ申置まゐらせ候。くわ敷申上度存候へ共、中々筆帛ニ尽しかたく、あらあら申残しまゐらせ候。誠に御遠々の所ながら、又々御出も御座候ハハゆるく御めに懸り度存幕まゐらせ候御事ニ御座候。其皆々様御初御親類中にもよろしく御伝言御頼申まゐらせ候。こなた効之進娘共よりも別段ニ御文も上不申候へとも、私よりよろしく申上度くれく申聞まゐらせ候。何もく萬々めて度かしく。

別段申上候。扱ておふみ事、久々病氣ニ御座候所、養生不叶去年十二月廿四日ニ死去致しまゐらせ候。乍序御しらせ申置まゐらせ候。かしこ。

(天保五年?)

ふてより

嶋屋秀次郎殿

清四郎殿

追て、節角く時から、御いとゐ被成候やうおねんしあけまゐらせ候。其御地へいかか御座候や。当年ハ殊之外暑氣つよく、六十年此方のあつさのよし申まゐらせ候。右故か当年ハ近年ニなふ豊年の由に申まゐらせ候。去年秋中より町々も殊の外さわかしく相成、当春迄ニ江戸町々不残ニ公より三度ほどおすくひ出まゐらせ候。其御地にてハ当年作物等はいかかの御ようすニ御座候や、扱々御安事申まゐらせ候。とうそく御ちかくと御左右御きかせ被下度候。何もくあらく申残しまゐらせ候。めてたくかしこ。

(注) 最上徳内夫人・ふでから野辺地町の実家島谷家へ、近況を報じ、又郷里の安否を問うたもの。筆蹟優麗典雅。